16　一井正典とドクトル・ヴァンデンボルグ

○渋谷　敦・松本　晉一

二〇世紀初頭、日本の歯学界にアメリカから無痛麻酔薬を導入し、金冠術を普及させる功績をたてたのは一井正典である。

彼は一八七七年、いわゆる明治一〇年の役に一五歳で従軍、敗戦の憂き目を味い、日本脱出を思い立つ。

熊本県人吉町の家財を売り払って作った旅費で、彼は一八八五年四月英船アラビック号に乗り、サンフランシスコに上陸した。しかしそのときすでに無一文。世話する人があって、加州サンタクララ郡ロースゲトス村のドクトル・ヴァンデンボルグに雇われ、彼の持つ二一エーカーの農場の農夫となって、ようやく生計を維持する。三年後の早春、偶然この村にやって来たのが後にコミンテルンで名を成した当時二九歳の片山潜。彼の「自伝」には、当時二六歳の農夫姿の一井正典が描かれている。

さて、農場主のヴァンデンボルグは、本業は歯科医師。一八七二年から七年間も彼の下で歯科技術を学んだ高山紀斎は、帰国後、当時日本では画期的な歯科の本『保歯新論』を著わし、一八九〇年に高山歯科医学院（東京歯科医専の前身）を創立して日本歯科医学界の基盤を作り、後に侍医局勤務、大日本歯科医会々長なども歴任した。その高山紀斎が七年前まで寄留していた縁もあって、一井正典もまたヴァンデンボルグの指導を受け、一八八九年、フィラデルフィヤ高等歯科専門大学に入学する。

しかし、たちまち学費に窮し、しばしば退学を決意するが、そのつど救援する人があって、特別生待遇も得、一九九一年一月無事卒業試験に合格、ＤＤＳの学位と二等金賞を受け、同大学助教師となり、歯科医院も開業した。九二年にはオレゴン州ポートランドに開業、二年後の九月、晴れて十年ぶりに帰朝して、神田は神保町に開業。この間、先輩高山紀斎の経営する高山歯科医学院にも出講、傍ら無痛麻酔薬・電気応用無痛治療法の研究で再び渡米するなど

の研鑽も重ねた。

一九〇〇年三月、文部省医術開業試験委員となり、〇八年には高山紀斎の推輓もあって宮内省侍医療御用掛を拝命、以来一九二七年に辞任するまで、二〇年の長きにわたって、明治・大正・昭和の三天皇および皇族方の診療に奉仕した。一九二九年六月、六七歳で病没するまで、とくに無痛麻酔薬と金冠術の普及など、日本の初期歯学の発展に貢献した功績は極めて大きい。

なお、日本歯学界の巨大な二つの星、高山紀斎と一井正典をその手で育てたドクトル・ヴァンデンボルグについて、米国大使館を通じ、シカゴの American Dental Association に問いあわせたところ、詳細不明の返信に接して唖然とした。そこで再びカリフォルニア州の State Library と交渉して、目下その実体把握に務めているところである。

思えば明治初年、札幌農学校に赴任して、若き俊才たちを育てた彼のクラーク博士にも匹敵する米人歯科医師ヴァンデンボルグ。いま郷党の先覚一井正典の生涯をまとめるにあたり、あわせて彼の恩人ヴァンデンボルグと、その故郷加州サンタクララ郡ロースゲトス村の今昔を訪ねることは、日本歯科学会初期の実相を知る上にも一つの収穫となるに違いない。

ご教示、ご援助を切にお願いする。

（松本歯科医院）